

# 国語問題

## 〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□・□で、二十三ページにわたって印刷してあります。  
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

—  
次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

自転車に二人乗りをしていて交通事故に遭い、友人を亡くして、東京から母の故郷である愛知県奥三河の澄川に引越した中学二年生の杉本潤。転校した中学校の同級生は、岡崎周、相川康男、神谷葵の三人だけだった。康男には知的障害を持つ双子の姉の里奈がいる。澄川には伝統芸能の「花祭り」という舞が伝えられていて、中心となる舞の手は「花太夫」と呼ばれ、舞を指導する暮林蒼汰は前の「花太夫」の孫にあたる。

その日も、放課後、潤たちは体育館で蒼汰の指導を受けていた。

花祭りの本番を一週間後に控え、蒼汰の指導は明らかに今までと違ってきている。採り物の持ち方、足を上げる高さ、回転の速度から指先の動きまで、注意は仔細にわたり、途中で何度も舞をとめられた。

長時間舞い続けるのも苦しかったが、舞いかけては途中で何度も繰り返させられるのも、相当の辛抱がいった。

I

「駄目だ駄目だ、もう一度最初から」

少し舞っただけで、すぐにストップをかけられる。また、周がギャクの足を出したらしい。

あまりのチュウダンの多さに、葵たちのお囃子もほとんど意味をなしていなかった。

「周、やちごまの向きが違う」

最初こそ潤や康男にも注意がいったが、今では注意を受けるのは周ばかりになっていた。

相手の動きをちゃんと見ようとしない周は、すぐに自分勝手に踊り出す。延々踊り続けるだけならそれでもなんとなくごまかされるが、こうして細部を見ていくと、周の踊りは明らかに間違いが多かった。

「周、また足がギョクだ」

II

「何度言ったら分かるんだ。ちゃんとまわりの動きを見ろ」

傍らの周の顔がだんだん赤くなってきた。

ただでさえ飽きっぽい周は、同じ箇所ばかり繰り返し直し直されることに、耐えられなくなってきたようだった。

「周、やちごまの角度をそろえろ」

「周、位置が違う。前に出すぎてる」

「周、そこは左じゃない」

III

「おい、周、また違う」

再びストップがかけられたそのとき。

突然、体育館の高い天井に、奇怪な鳥のような甲高い声が響き渡った。

ハツとして視線を上げれば、顔を真っ赤に染めた周が手にしたやちごまを力いっぱい床に叩きつけ、言葉にならない叫び声をあげながら、走り去って行ってしまった。

潤は呆気にあつてその後ろ姿を見送った。

いつもだらしのない笑みを浮かべ、へらへらしていた周。

なにより、花祭りと聞けば誰より張り切っていた周が、こんな癩癩を

いとは思ってもみなかった。

「……悪い。やりすぎた」

蒼汰が 1、頭を搔く。

「俺もちよつと気張りすぎだ。今日のところはここまでにしよう」

練習は、ここで a お開きになった。片づけを始めた蒼汰を、葵が無言で手伝う。

初めて花太夫を b 務める花祭りを前に、蒼汰も神経をとがらせているのかもしれない。

「大丈夫だに」

校舎に向かう石段を上っていると、康男が背後から肩を叩いてきた。その後ろから、里奈がついてくる。眼が合うと、里奈は切りそろえた前髪を揺らしてにっこり c 微笑んだ。

切り裂くような声をあげた周を思い返すと、潤はまだ胸の中がざわついたが、康男も里奈もまるで d 意に介している様子がない。

そこに至るまでの経緯はきつと大きく違うのだろうが、二人の態度はときとして、とてもよく似て見えた。

帰り支度を終えて康男たちと一緒に校庭に出れば、杉並木の向こうに、新鮮な e タマゴの黄身のような夕日が落ちていくのが眼に入った。

まだ指先が痺れるほどに寒いが、日一日と日は長くなってきた。

「そういや、俺、昨日父ちゃんから聞いたんだけど」

里奈のマフラーを f マキ直してやりながら、康男が鼻の詰まった声を出す。

「花祭りが終わったら、蒼汰兄ちゃん、結婚するらしいだに」

「えっ?」

潤は思わず振り返った。

「やっぱ g 花太夫さんの手術があるから、決心したんじゃないかって父ちゃんが言ってたぞら」

② しかもその相手は、葵の姉の茜だという。

「そりゃあ、蒼汰兄ちゃんもあつくなくなるすらよ」

集落の若い男女が結婚することを、康男の両親は 2 喜んでいられるらしい。

「神谷って、そのこと知ってるの？」

「そりゃ、知ってんだら。アオ(葵)はアカ(茜)姉ちゃんと仲いいもの。ま、俺らあは、まあたたく、なあんにも、知らんかったけど」

呑気な返答に、潤は拍子抜けする。千里眼の如く思っていた康男の視界には、その実、大きな死角があった。

だって、そんなこと、あるわけない。

蒼汰を前にした葵の隠しきれない華やぎ。

ごく一部の男子にしか示されない、女子のあの口調、あの態度。東京のクラスで、何度も眼にした。あれは、憧れの男子と接するとき、彼女たちが心中に抱く微かな期待の表れだ。

隠れてマフラーを編んでいたという噂が本当なら、葵は姉と蒼汰の結婚話をどんな気持ちで受けとめたのだろう。

無言で蒼汰を手伝っていた、葵の冷たい横顔が浮かんだ。

「あ！ 周ちゃんだ」

背後の里奈が、突然明るい声をあげる。

校庭の隅の祠の前で周が蹲っていた。

「周ちゃん」

さっきのことなどなかったかのように、里奈が無邪気に駆け寄っていく。康男に眼で頷かれ、潤もその後続いた。潤たちの姿を見ると、周はいつものだらしない笑みを浮かべた。

「い、ごめん……」

その頬や口元に鼻水の跡が付き、分アツい眼鏡のレンズも涙ですっかり曇っている。「気にすることないだに」

穏やかに眼を細め、康男が傍らに腰を下ろした。

「蒼汰兄ちゃんも、言いつぎたつて言つてたずら」

祠の前に、ピンク色の小さな花を咲かせたカラスノエンドウや、ハコベが置いてある。野に咲き始めた早春の花たちだ。周がお供えのつもりで並べたらしい。

里奈がそれを綺麗にそろえて花束にし、本格的にお供えを始めた。

「蒼汰兄ちゃんが本気になるのは、ちゃんと理由があるずら」

昨年まで、周がどんなに好き勝手に舞を踊ろうが、蒼汰は注意したりしなかった。

「でも、それは、お前がまだ、豊橋からきてるお客さんだったからだに」  
助っ人に来てくれる神楽クラブの子を、徹底的にしごくわけにはいかない――。

以前蒼汰がそう言っていたことを、潤も思い出した。

あるとき蒼汰は、本当の澄川の舞は、澄川の子供にしか受け継がれないとも言っていた。七百年続く舞を正確に伝えようとして、蒼汰もまた、必死になっていたのだろう。

「周はもう、お客さんじゃないだに」

康男の言葉に、周は弱々しく首を振る。

「でも、あんなに厳しいんじゃ、俺、駄目だよ。もう、ついていけないよ」

「そんなことないずら」

「いや、きつと駄目だよ」

二人のやり取りを、潤は傍らで見守ることしかできなかった。

「だって、俺、兄貴と違って出来が悪いし、前の学校でも、しょっちゅうあんななっちゃって、先生からも見捨てられてたしさ」

坊ちゃん刈りの大きな頭を、周はゆさゆさと揺さぶった。

「だから、俺、前のクラスでもハブられてたし、家で折檻(注)かんされても仕方がないんだって……」

周が頭を振るたび、涙がぼたぼたと地面に散る。

「そんなこと、ないすら」

「じゃ、どうして……」

周が声を震ふるわせた。

「どうして、お父さんにベルトでぶたれても、お母さんとはめてくれないの？」

周の身体にできた傷が頭をよぎり、潤は口元を引き締しめる。そんな親がいることが、潤にはどうしても信じられなかった。

「俺の出来が悪いからじゃないの？」

「違う(よ)すら」

「じゃ、どうして?」

「俺にも分かん。でも、じいちゃんとかあちゃんは、お前をぶつか?」

「……ぶたない」

「俺やアオや杉本は、お前をハブるか?」

「……ハブらない」

「校長先生や蒼汰兄ちゃんは、お前を見捨てるか?」

「……見捨てない」

「だ(だ)ら?」

康男は辛抱強く、周の顔を覗き込む。

「それにお前、あんなふうになったの、こっちにきてからは初めてだら。気にすることなんてないすら」

それでも周は俯いた顔を上げようとはしなかった。

「でも、俺がこっちにきてから、お母さんは、一度も会いにきてくれない。運動会にも、きてくれなかった。花祭りだって、絶対見にこない」

泣き腫らした頬に、再び涙が筋を作る。透明な涙を地面に届くほど垂らしながら、周は嗚咽した。

そのとき、周の傍らの影が動いた。

花束を作っていた里奈が、泣いている周の身体を包み込むように腕を広げた。

「大丈夫だよ」

⑤ 涙と鼻水でべたべたの周の顔を、迷わず自分の胸に引き寄せる。

「周ちゃんのお願ひ、ちゃんと榊神社に通じたよ」

片手で周を抱きながら、里奈は夕日が落ちていく杉山を指さした。

「この祠はね、鬼様のいる、榊神社に通じているんだって。周ちゃんのお願ひ、鬼様に届いたよ。お母さん、きつとくる」

まだ澄川にきたばかりの頃。学校の裏の竹藪で、潤が過呼吸の発作を起こしたときと同じように、里奈は周を柔らかく包み込んでいた。

「大丈夫。里奈だって、たくさん失敗するけど、鬼様が全部なしにしてくれる。今年は周ちゃんも、里奈と一緒に鬼様に踏んでもらおう」

⑥ それまで必死にこらえていたのか、ついに周は大声をあげて泣き出した。里奈は優しくその背中をさすってやっている。

康男に眼で促され、潤はその場をそっと離れた。

日が落ちると、冷たい空気の中、木々の梢がくつきりと浮かび上がってくる。



白い息を吐きながら、潤と康男は自転車置き場までやってきた。

「相川」

静脈のように張った落葉樹の枝を眺めながら、潤は康男に声をかけた。

「鬼様に踏んでもらうって、どういうこと？」

「ああ、まだ杉本は知らなかったたら」

自転車のスタンドを跳ね上げ、康男が洩を啜る。

山見鬼、榊鬼、茂吉鬼と、花祭りには三人の鬼が登場する。中でも一番面が大きく霊力も強い榊鬼は、花祭りの主役とも

謳われる。

その榊鬼を松明で舞庭に導くのは、三つ舞を踊る少年たちの役目だ。

次世代を担う少年に導かれ、人里に召喚された荒ぶる鬼は、そこで花太夫や宮人たちと問答を行う。

問答によって花太夫に調伏された鬼は、今度は人のために反問を踏むのだという。

「反問？」

「悪いものを踏みつけて、もう出てこないようにするんだに」

病人が出たり、悪いことが起きたりした年、依頼があれば、榊鬼は依頼主の家まで赴き、病人や主人の背中を踏みつける。

神部屋で子供の背中を踏むこともある。

「俺も里奈も、毎年、神部屋で榊鬼に踏んでもらってるすら」

潤が黙って聞いていると、康男がふっと笑みを漏らした。

「俺、昔、神部屋で榊鬼を蹴ったことがあるすらよ」

「え？」

榊鬼の面は重いもので五キロを超える。その巨大な面をかぶり、精神統一している舞手を後ろから思い切り蹴ったという。

「初めて父ちゃんに死ぬほど殴られたすら」

「でも、なんで」

「里奈が変わらんかった」

空気がしんとした。

ひとはけの夕映えが浮いた群青色の空を、康男はじつと見つめている。

「毎年鬼様に踏まれても、里奈は俺らと一緒ににはならんかっただに」

道に迷う。勉強についてこれられない。言われたことを守れない。

なにかに夢中になりすぎれば、トイレにいくことさえ忘れてしまう。

「いつまでたっても里奈は変わらん」

腹が立って、悲しくて、悔しくて、気がついたときには鬼様の背中を力いっぱい蹴っていた。

里奈を守るため、一生澄川から出ない。

(注16)

その覚悟に辿り着くまでに、傍からは想像できない大きな葛藤を、康男は乗り越えなければならなかったのだろう。

「でも……」

手袋をはめ、康男は自転車を引いて歩き出した。

「今は、変わらんのが里奈なんだって思うようになっただに」

潤を振り返り、康男は笑みを浮かべる。苦しきのない、真つ直ぐな笑みだった。

「里奈とおると、楽しい」

潤も自然に頷いた。

あの雪の日。

きらきらと飛び散る雪飛沫の中、はじけるような笑みを浮かべていた里奈は、昔絵本で見た星屑の鱗粉を撒き散らす妖精

のようだった。

「それに、里奈にはできんことがいっぱいあるけど、里奈にしかできんこともある」  
潤はもう一度深く頷いた。自分も、それを知っている。

大丈夫——。

温かな胸に抱き寄せられたとき、心の底から安堵した。最初は少し驚いたけれど、でもあのとき既に、頑なに凝り固まっていた己の心の一部は溶け始めていたのだ。きつと。

「相川」

気づくと、自然に言葉が出ていた。

「俺、<sup>(注17)</sup>いちの舞、やってみようかな」

自転車をとめ、康男が潤に向き直る。

そして近づいてくるなり、勢いよく潤の両肩に手をかけた。至近距離で向き合った康男の瞳は、小さいながらも里奈に負けない輝きに溢れていた。<sup>(注18)</sup>

顔も性格も態度も少しも似ていないけれど、<sup>⑨</sup>康男と里奈はどこかが似ている。

「でも……、本当に俺なんかでいいのかな」

「いいに決まってるすら！」

康男は満面の笑みを浮かべ、潤の肩をバンバンと叩いた。

「杉本、この前言いかけたけど、俺たちは二人とも鬼の孫だに」

「え……」

「俺の爺ちゃんは、茂吉鬼すら」

潤の祖父が舞っていた山見鬼が開いた浄土を閉じる。役鬼が、康男の祖父が舞う茂吉鬼なのだそうだ。

「俺らも将来、鬼になるだに」

康男の言葉に、潤は暫し茫然とした。

⑩ 急になにかに縛られた気がして、俄かに恐ろしいような気分になった。

(注1) 仔細に：細かいところまで。

(注2) やちごま：舞で手に持つ道具。小さな木刀の形をしている。

(注3) 花太夫さん：暮林蒼汰の祖父。

(注4) 拍子抜けする：調子がくるう。

(注5) 千里眼：遠いところや人の心などを見ることが出来る能力。

(注6) 祠：神をまつる小さな建物。

(注7) 折檻：体罰を加えてこらしめること。

(注8) 嗚咽：声をつまらせて泣くこと。

(注9) 舞庭：舞を舞う所。

(注10) 召喚：呼び出すこと。

(注11) 荒ぶる：荒々しい。

(注12) 宮人：花太夫を補佐する人。

(注13) 調伏：祈りによって悪霊を降伏させること。

(注14) 反閨：舞の特殊な足の踏み方。その場の悪い気を整えて清らかにする。

(注15) 神部屋：舞い手の控え室。

(注16) 葛藤：なやみ苦しむこと。

(注17) いちの舞：村の若者の中で最も踊りに秀でた者が踊る舞。

(注18) 浄土：仏の住む、けがれない世界。

(古内一絵「花舞う里」)

問一 〓線 ㉠㉡のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。㉢は漢字一字で答えなさい。

問二 〓線 ㉠「お開きになった」・㉡「意に介している」はどのような意味ですか。最も適当なものをそれぞれの中から選び、記号で答えなさい。

- ㉠ お開きになった
- |   |   |
|---|---|
| ア | 大騒ぎ <small>さわぎ</small> になった                         |
| イ | おしまいになった  |
| ウ | 仕上げに取りかかった  |
| エ | いやな雰囲気 <small>ふんいき</small> が漂 <small>ただよ</small> った |
- ㉡ 意に介かしている
- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| ア | 怒 <small>おこ</small> っている    |
| イ | 疑 <small>うたが</small> っている   |
| ウ | 安心 <small>あんしん</small> している |
| エ | 気 <small>き</small> にしている    |

問三 I ㉠ ㉡ し、同じ記号を使つてはいけません。

ア 蒼汰そうたの声が叱責しっせきに近くなる。

イ 特にこの日の蒼汰は厳げんしかった。

ウ 次第に蒼汰は周の名前しゅうしか呼ばなくなつた。

エ 急に蒼汰がわけのわからないことを言い出す。

問四 あ い にはどのことばを入れたら意味がよくわかるようになりますか。次の 〓線の中からはまることばを選び、必要な場合は正しい形に直して答えなさい。

- |    |     |      |      |       |
|----|-----|------|------|-------|
| 放す | 起こす | 取られる | はじける | かこまれる |
|----|-----|------|------|-------|

問五

1 . 2  
に入ることはとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使つてはいけません。

- ア 我慢強く      イ そつげなく      ウ 決まり悪げに      エ いきおいよく      オ 我がことのように

問六

——線①「日一日と日は長くなってきている」とありますが、季節を表すことばを本文中から三字以内で抜き出して答えなさい。

問七

——線②「そりゃあ、蒼汰ちゃんもあつくなる」とありますが、康男はなぜそう思うのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 康男の父から集落の人に結婚することを広められて、蒼汰がとても恥ずかしくなっていると思ったから。  
イ 結婚を前にして蒼汰は花祭りに対しても意欲的になり、舞の指導にもいっそう力が入ると思ったから。  
ウ 祖父が手術をすることになったのに、このまま結婚式をあげてよいか蒼汰が悩んでいると思ったから。  
エ 結婚相手が目の前にいるので、蒼汰がいいところを見せようと指導がきびしくなってしまうと思ったから。

問八

——線③「大きな死角があった」とありますが、この説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 花太夫さんが手術することを潤は知っているはずだと、康男が早とちりしていた。  
イ 蒼汰と茜の結婚を妹の葵が最近まで知らなかったことに、康男が気づいていなかった。  
ウ 同級生で親しいにもかかわらず、葵は姉の茜と仲がいいと康男がすっかり思いこんでいた。  
エ マフラーを編んでいた葵の気持ちは、潤にしっかりと伝わっているものと康男が信じていた。

問九 — 線④「ッお客さんじゃない」とありますが、これはどういうことを言っていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 外の土地から移り住んだ周も、地元の人間として認められたということ。

イ 周がしっかりしてきたので、蒼汰も本気で教えるようになったということ。

ウ 周が本来の姿を見せることで、仲間としての親しみが増してきたということ。

エ 豊橋出身だと思っていた周が、実は澄川出身であることがわかったということ。

問十 — 線⑤「周ちゃんのお願い」とありますが、周は何を願っていると考えられますか。「ことを願っている。」に続く形で二十字以内で書きなさい。

問十一 — 線⑥「康男に眼で促され」とありますが、「康男」は何を伝えたかったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周のためにはここは里奈にまかせた方がいいということ。

イ 周が感情をおさえられなくなる前に立ち去ろうということ。

ウ 大切な話があるのでこの場をそつと離れてほしいということ。

エ 寒くなってきたので早めに自転車置き場に戻ろうということ。

問十二 — 線⑦「苦しさのない、真っ直ぐな笑みだった」とありますが、康男はなぜこのような「笑み」を浮かべたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 長いあいだ不満に思っていた鬼様おにのことを、思い切り蹴けることができたから。
- イ 里奈りなになぐさめられた周しゅうが戻もどってきて、花祭りの舞まいができるようになったから。
- ウ 自分なりの結論にたどり着き、ありのままの里奈を受け入れることができたから。
- エ 里奈が変わっていくことをあきらめて、自分が里奈にあわせられるようになったから。

問十三 — 線⑧「己おのれの心の一部は溶け始めていたのだ」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 固く信じていたものがゆらぎ始めた。
- イ 蒼汰そうたに反抗こうかうする気持ちがめばえ始めた。
- ウ 葵あおいに対する好意をはっきりと感じ始めた。
- エ 閉ざしていた心に変化がおとずれ始めた。

問十四 — 線⑨「康男と里奈はどこかが似ている」とありますが、どんなところが「似ている」のでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 花祭りの鬼おにの孫として、責任の重みを感じさせるところ。
- イ 何かに夢中になると、周りが見えなくなってしまうところ。
- ウ 純朴ほんぱくな心を持ち、次の一步を踏み出す手助けができるところ。
- エ 心が素直すすなあまり、かんたんに人にだまされてしまうところ。



問十五 — 線⑩「急ににににに縛しばられた気がして、俄はなかに恐ろしいような気分になった」とありますが、この時、潤はどのような気持ち

ちになったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 康男やすおとともに里奈りなを守るため、澄川すみかわから離はなれることができないと気づかされた。
- イ 鬼おにになることを運命づけられ、自分の中のおぞましい「鬼」の存在に気づいた。
- ウ 花祭りの舞の難しさを思い出し、蒼汰そうたの指導を受け続けることに不安をおぼえた。
- エ 伝統を受けつぐことの重大さに気づき、緊張きんぱんした気持ち心がしめるようになった。

問十六 《《線「踊り続けるだけなら」は直接どのことばにかかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。》》

踊り続けるだけなら

- ア それでも
- イ なんとなく
- ウ ごまかされるが、
- エ こうして
- オ 細部おぼろを見ていくと、
- カ 週の踊りは
- キ 明らかに
- ク 間違いが
- ケ 多かつた。

周の踊りは 明らかに 間違いが 多かつた。

二

次の、ある精神科医の文章を読み、後の問いに答えなさい。

突然ですが「大人の条件」とは何でしょう。社会的には成人式が行われる二十歳ということになるのでしょうか。テレビのニュースでは、毎年のように、祝辞を述べる市長に野次を飛ばしたり、会場でお酒を飲んで奇声を上げたりする新成人の姿が取り上げられて、荒れる成人式が話題になります。

そんな様子を見れば、「二十歳と言っても、まだまだ子どもじゃないか」と感じる人が大半だと思いますが、A いたい、どうすれば大人になれるのでしょうか。

さて、その成人式のニュースですが、あるワイドショーのディレクターによると、「今年はこのあたりが荒れそうだ」という情報をあらかじめ集めて、カメラを準備して取材に行くのだそうです。

B ワイドショーの作り手側は、成人式が荒れるのを大いに期待しています。それなのに、その様子を放送する番組のなかでは、「もう大人なんですから、ルールを守ってもらいたいですね」と司会者やコメンテーターが苦言を呈する。彼らが静粛にしていたら、ネタに困るはずなのですが……。大人たちの本音と建前には、かなりの乖離があるのです。

ワイドショーのコメンテーターとして、長らくこうした矛盾に接してきた私は、あるときふと気づきました。

「こうして本音と建前の矛盾を受け入れて、それなりに対応できる。それが『大人』ということなのかもしれない……」

かつて、若者の反抗のシンボルとして絶大な人気を誇ったミュージシャン・尾崎豊は、作品のなかで大人たちの矛盾を鋭く指摘し、怒りを訴えました。私は彼よりちょっとだけ年上だったので、彼の人気の絶頂期は研修医になるうかという時期。いわば大人の世界へ片足を突っ込んでいたわけで、「言いたいことはすぐよくわかるけど、『清濁併せ呑む』って言葉もあるよなあ」と感じたのを覚えています。

大人だって矛盾や怒りを感じることはあります。でもそれを外に訴える前に、まずは自分のなかでそれらと向き合わなくてはならない。成人式で衝動的に暴れても、警察のお世話になるだけです。世の中には本音と建前、矛盾があることを認めて、

それに対して感じる怒りや反抗心を自分なりに

a

できること。まずそれが大人の条件といえるでしょう。とはいえ、そうした世の中に対応しようとすると、自分のなかにも二面性や矛盾を抱えることになります。

私の診察室にも、それらを強く感じさせる人たちがやってきます。外見はいかにも清纯そうな感じなのに、心の奥に欲深い感情を隠している主婦。「平和、平等」を講演で説きながら、家庭では争いが絶えない作家。詐欺まがいの手法で集めたお金を福祉に寄付する青年……。

彼らは一見うまく対応しているように見えますが、内面では

1

情緒不安定やうつ状態に陥ってしまったわけ

です。自分のなかの二面性や矛盾に対応するのは、じつはなかなか難しいことなのです。

「そんな偉そうなことを言ってるあんたはどなのよ？」という声が聞こえてきそうなので告白しますが、私も自分のなかの矛盾に悩んだ時期がありました。

学生時代の私は、昼はふつうの医学生をしつつ、夜は怪しいサブカル雑誌で編集のアルバイトをしていました。医者になってからも病院で勤務をしながら、ゲーマー、ライターという夜の顔を使い分けて二重生活を送ってきました。

白衣を着て寡黙に働く自分と、先日ドラッグで警察の厄介になったばかりのテクノ系ミュージシャンにインタビューをする自分。「いったい、どっちがほんとうなの？」と混乱しそうなことがあります。

でも、地味に働く医者 of 自分もサブカル好きな自分も、どちらも間違はなく「私」でした。どっちがほんとうの自分かなんて悩むのはバカバカしい。大切なのは、状況に応じてふさわしい自分を出せるかどうかであって、一つの自分で生きることなんてない決めたのです。

それからは一気に気持ちが悪くなりました。たまに「人格を使い分けるようなことはよくない」などと言う人もいますが、そんな人には、かのエリカ様のように「べつに」と答えればいいのです。他人がどう言おうと、自分のなかで言動に責任をとれるなら、それでいいのではないのでしょうか。

2

たとえば表の顔は純真な乙女、でも、裏の顔は欲と嫉妬に心をたぎらせた魔女、といった女性であっても、「自分には二つ

の顔が必要なよ」ときちんと自覚してコントロールを意識すれば、それにふりまわされることはないと思うのです。

⑤  
 といつても、二つの顔をコントロールすればすべてがうまくいくわけではなくて、ときには計算や打算を捨てて自分を出したほうがいい場面もあるでしょう。それこそ子どものように、感情をストレートに訴えることが必要な場合もあります。

大人として自分のなかの二面性や矛盾をコントロールしつつ、必要ならそれらを捨てて子どもに戻ることができる。こうして内面を自由に行き来できることも、大人の条件かもしれません。

当時の尾崎豊に言わせれば、「そんな二枚舌みたいな生き方をしているから大人は醜いんだー」ということになるのかもしれませんが、それは「柔軟でcが深い」ということだと私は解釈しています。

ですから、ふだんはまじめな会社員をやっているでも、プライベートまでまじめである必要はないのです。

もちろん、犯罪になるようなことをしてはいけません、「こうじゃなきゃ」と自分を縛りつけたり押し殺したりするのはある意味、不健全。そうした無理をすると、そのストレスからイライラして駅や居酒屋でキレるといふ、まさに、大人らしからぬ行動につながってしまうかもしれません。

(香山リカ「気にしない技術」)

- (注1) ワイドショー：はば広い内容のニュースを取りあげたテレビ番組。
- (注2) デイレクター：テレビ番組などの制作責任者。
- (注3) コメンテーター：専門的な立場から解説をする人。
- (注4) 乖離：離れること。
- (注5) 研修医：国家試験に合格した後、基礎を身につけるために、外科や内科など広く学ぶ医者。
- (注6) 情緒不安定：怒り・悲しみ・喜びなどの感情の変化が激しくなり、安定しないこと。
- (注7) うつ状態：心が晴れ晴れせず、意欲がなくなってしまう状態。
- (注8) サブカル：特定の限られた範囲の人々に支持される文化。
- (注9) ゲーマー：コンピュータゲームを愛好する人。
- (注10) ライター：作家。
- (注11) 寡黙：口数が少ないこと。
- (注12) ドラッグ：薬物。
- (注13) テクノ系ミュージシャン：電子楽器を多く使って音楽を作る人。
- (注14) たぎらせた：わきあがらせた。

問一 〰️線 ①「苦言を呈する」・②「二枚舌みたいな」はどのような意味ですか。最も適当なものをそれぞれの中から選び、記号で

答えなさい。

① 苦言を呈する

- ア 忠告する
- イ つらくなる
- ウ ばかにする
- エ 恥はずかしくなる

② 二枚舌みたいな

- ア 他人には理解できないような
- イ 前ちがと食い違ちがうことを言うような
- ウ 嘘うそを隠かくすために口数が多いような
- エ 世の中に対して悪意を持つような

問二

A ・ B

はいけません。

に入ることをばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使って

- ア では
- イ しかし
- ウ つまり
- エ そのうえ
- オ たとえば
- カ あるいは

問三

―線 ①「大人たちの本音と建前」とありますが、「荒れる成人式」の報道に関する「本音」と「建前」として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使ってはいけません。

- ア 成人式をワイドショーで扱あつかうこと。
- イ 二十歳はたちの人を大人として認めること。
- ウ 成人式が荒れることを期待すること。
- エ 新成人に社会のきびしさを教えること。
- オ ルールを守れない新成人を責めること。
- カ 成人式は行うべきではないと主張すること。

問四 — 線②「清濁併せ呑む」とありますが、どのようなことを表していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ワイドショーのコメンテーターとして、世の中の矛盾をきびしく指摘して人々に問いかけていくこと。
- イ 大人たちの矛盾を指摘して怒りをぶつけるだけではなく、その背景や事情も理解して受け入れること。
- ウ 外見はいかにも清純そうな様子を周りの人に見せながら、その心の奥に欲深い感情を隠していること。
- エ わざわざ成人式にまで出かけていき、市長に野次を飛ばしたりお酒を飲んで奇声を上げたりすること。

問五

a に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 修飾      イ 創造      ウ 消化      エ 告白

問六

1・2 に入ることばの組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ① 折り合いがつけられなくなって・② 折り合いをつけて
- イ ① 折り合いをつけて      ・② 折り合いがつけられなくなって
- ウ ① 折り合いをつけて      ・② 折り合いをつけて
- エ ① 折り合いがつけられなくなって・② 折り合いがつけられなくなって

問七

——線③「二重生活を送ってきました」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 昼も夜も休まずにずっと働き続けてきたこと。
- イ 全く性質の違った仕事を同時にしてきたこと。
- ウ 自分のなかの二面性や矛盾に対応してきたこと。
- エ 学生なのにアルバイト中心の生活をしてきたこと。

問八

——線④「どっちがほんとうの自分かなんて悩むのはバカバカしい」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 矛盾に対応し続けていくことで、「これがほんとうの私だ」と言える形がひとりでに浮かび上がってくるから。
- イ 自分にふさわしい状況を整えることが、「これがほんとうの私だ」と言える自分を見つける最良の方法であるから。
- ウ 常に自分の二面性や矛盾と向き合っていることはおろかで、「これがほんとうの私だ」と言う根拠を見失ってしまうから。
- エ 人はいろいろな面を持ち合わせており、一つの面だけを取りあげて「これがほんとうの私だ」と言うことはできないから。

問九

——線⑤「それ」が指す内容を、これより後の本文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問十

——線⑥「b」に入ることばとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 偽にせ
- イ 嘘うそ
- ウ 珍ちん
- エ 素す

問十一 C に入ることばとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 情じょう      イ 闇やみ      ウ 謎なぞ      エ 懐ふところ

問十二 〓線『大人の条件』とは何でしょう」とありますが、筆者はどのような答えを出していますか。適当なものを次の中から

二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 表の顔と裏の顔をうまく隠かくすこと。      イ 世の中には矛盾むじゆんがあると認めること。  
ウ 状況ききょうをよく見て冷静な意見を言うこと。      エ 犯罪になるようなことはしないこと。  
オ 自分の中の二面性や矛盾を捨てられること。      カ 情報をあらかじめ集めて対応すること。

問十三 ！―線「そうだ」と同じ働きをしているものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 夕方から雨が降りそそうだ。      イ 四月から中学校に行くそそうだ。  
ウ あしたは早く起きるそそうだ。      エ 遊びに行くのはやめるそそうだ。